

二〇二六年二月二八日(参加者一六名)

春光の手水を掬ふ柄杓かな	澄子
春光に翳せば珠玉シーグラス	なつき
護摩供へと薄氷踏みて修行僧	なつき
薄氷を踏みて詣でし大比叡	きりん
春光の湾処に群るる稚魚の影	わかば
薄氷の虜となりし海難碑	よし女
春光を散らし群鳩翔ちにけり	澄子
大路いま一本道に風光る	澄子
春光の水脈や航く船返す波	よし女
春光の沖に水脈引く巨船かな	わかば
風紋のままに池面の薄氷	わかば
尾根ゆけば春光四方に広がりぬ	むべ
薄氷の軋むと見れば罅走る	あきこ
一条の春光とどく山家かな	よし女
薄氷に綺羅の生まるる朝の池	むべ
春光に伏目の阿弥陀如来かな	あきこ

若鮎句会みのる選・二〇二六年三月七日